

## 異業種交流組織

# 北・北海道工業人クラブのあゆみ

北・北海道工業人クラブ会長 山本 克郎  
(静修女子大学教授)



### 異業種交流組織について

この数年来中小企業経営をとりまく環境は大きく様変わりしてきた。もちろん、中小企業に限らず日本経済の構造変化が急ピッチで進行し、経済から政治へと変化波動は拡大している。

こうした変化により中小企業の異業種交流組織の必要性が加速化されたのか、交流が活発な動きをみせているので簡単にこれまでの足取りをみておこう。

第二次大戦後、廃墟の中から復興に取り組み、60年代の奇跡的な高度成長によって、イギリスを超えて、西ドイツを抜いてアメリカに次ぐ経済大国への道をひた走るが、このめざましい経済成長は日進月歩の技術革新に支えられ、促されるという側面を見落すことができない。新しい商品が次々に生産され、内外の旺盛なニーズに対応して拡大発展の道をたどってきた。

70年代に入り、71年のドルショック、73年のオイルショックに遭遇して、それまでの高度成長路線から低成長・安定成長への転換を迫られているが、経済構造の変化と技術革新の進展は中小企業とその経営にさらに大きなインパクトを与えることになる。

景気循環の波に洗われ、社会変化に適応しない中小企業、技術進歩に立ち遅れる中小企業は淘汰されていく。中小企業も時代の流れに対応し、技術開発への取り組みが求められるようになるが、こうした中で埼玉県など自治体レベルでの中小企業対策として当時の「経営合理化推進工場グループ制度」から「知識集約化推進工場グループ制度」

へ再編成しようとの試みがみられる。

70年代後半に入るとこれら先駆的な試みから異業種交流を推進しようとする動きが生まれ、いくつかの県や商工会議所によって取り組まれ始める。

中小企業は一般的に技術者や開発資金不足から自主技術開発力に乏しく、自社内で必要な技術のすべてを確保し得ない場合があり、積極的に他社や公的研究機関などが持っている技術やノウハウを自社に導入して改善を図ることが求められている。

このため中小企業事業団体は77年度から「技術移転促進事業」を実施するようになったが、81年には「技術交流プラザ開催事業」を発足させていた。この試みは中小企業事業団が都道府県と協力して、各種研究機関、大企業などが持っている特許やノウハウを中小企業の求めに応じてスムーズに技術移転を図れるように中小企業の技術に関するニーズとシーズを発展するためのプラザを開くというものだった。

この年の中小企業白書（昭和56年版）では、「技術と知識で拓く中小企業の経営」の中に「異業種間企業交流」の項目が設けられた。78年以降異業種交流活動は活発化していき、この年を「異業種交流元年」と呼ぶ人もいる。

その10年後の88年、国は融合化法を施行し、「異分野中小企業が知識を融合させ、新分野を開拓すること」によって、中小企業の経営資源を交流し、融合化させ、新市場や新商品を開発し、経営革新を促そうとの施策を進めている。

こうした全国的な流れに影響されて、北海道や

旭川でも遅ればせながら異業種交流組織がつくれてきました。

### 北・北海道工業人クラブの誕生

旭川でも異業種交流クラブの動きはいくつかあって、北・北海道工業人クラブ（以下工業人クラブと略称する）でも設立以前数年前から、金属、機械、木材、木製品、土木、建築など多様な業種の中小企業経営者が技術開発や情報交流の活動を重ねてきました。

工業人クラブの発足は88年6月で、今年で満5年を経過した。

88年1月、会員となる企業が中心になって木材の付加価値を高めるために、元旦の新聞に「木材乾燥の普及運動」を一面広告として掲載している。2月には道立工業試験場の紹介展—新しい地域技術に取り組む—への見学会を10社で組織している。

機も熟してきたことから、2月には北海道大学経済学部米山喜久治教授（経営工学専攻）を招いて、「工業人クラブの旗揚げのために」とのテーマで有益な講義を頂くなど設立へ向けて準備の会合が重ねられていった。

趣意書（案）、会則（案）、事業計画（案）、予算案などの準備が進み、クラブが取り組むプロジェクト事業案も用意した。

趣意書にはその時の考え方や想いを込めて次のように書き込んだ。「いま、日本は大変な経済の変化の時代に遭遇しています。欧米諸国と同じように成熟化社会に入っています。市場は飽和し、従来のままの延長線では成長の機会も乏しくなっております。この急激な変貌をとげつつある社会は、一層経済のソフト化・サービス化・情報化が進み、再び人口や産業が大都市に集中し、地方都市との格差を広げる傾向にあります。

地方に住む者にとって自らの企業の将来や個々の生活について、こういった危機を克服するために、新たな努力がなされているところであります。

北・北海道は豊かな自然条件に恵まれています。私たちは、この地域の持つ資源を活かし、既存産業の特性を助長することによって地場企業が競争

力を強め、産業の活性化を図ることで雇用を拡大し、所得を増大させ、地域の活力を蘇らせねばならないと考えます。数年前より、異業種交流や産・学・官で構成する者が集まり、その実現のため種々検討してきました。

この度、この趣旨をさらに広く賛同される方に参加を戴き、変転して止まない産業経済社会にあって、調査研究を進め、相互の情報を交流し、これから社会をリードする新機軸を創り出したいと考えます。

以上、本クラブの設立趣意に御理解・御賛同を賜り、御参加下さるよう御願い申し上げます。」

また、会則に目的として「会員の利益の向上を図り、地域産業と社会の発展に寄与すること目的とする」という、目的達成のための事業に次の五つの事業を掲げた。

- ・企業力の向上、技術の集積、地場素材の活用、情報の交換を図るための例会の開催
  - ・講演会や講習会などの開催
  - ・異業種間交流会や関係官庁、学会、試験研究機関との交流会の開催
  - ・必要に応じて、テーマごとのプロジェクトの編成
  - ・懇談会および親睦交流会の開催
- 例会は毎月第一水曜日とし、プロジェクト事業として、
- ・情報交流プロジェクト
  - ・工業技術センター建設促進プロジェクト
  - ・国際経済・技術交流プロジェクト
  - ・克雪・利雪技術開発プロジェクト
  - ・廃棄物リサイクル活用システムプロジェクト
  - ・老人保健施設プロジェクト
  - ・イベント企画プロジェクト
  - ・特許申請プロジェクト
- を挙げ、それぞれプロジェクトごとにチームリーダーを決定し、参加希望会員によって構成することとした。盛り沢山でこれらがすべて開店し、フル操業には至らなかったが、設立時のクラブの様子を表現しているように思われる。

## 工業人クラブ設立5年のあゆみ

工業人クラブは今年で満5年を数える。この間のあゆみを経過をふまえて述べる。

### ◎ 共同研究開発の始まり

異業種交流クラブだから会員が共同研究に取り組むテーマを選定しようということになり、挙がったものは、

- ・北海道産カラマツの有効活用を目指す薬品処理技術
- ・木のギブス（可塑化木材応用）
- ・高温水熱源による木材乾燥（省エネ）
- ・建築廃材急速炭化装置
- ・除雪装置
- ・下水污泥有効利用
- ・北方圏におけるエネルギー有効利用総合システムの構築

である。これらの研究開発はしばらく時間も資金も必要なことから、それぞれ共同研究グループをつくって取り組むこととなった。

### ◎ 専従事務局長をおく

当時多くのクラブにみられるように役所か商工会議所などの団体に事務局を置き、その担当者が事務局を預かるというスタイルは取らないで、全くの民間サイドで事前の自立した体制でいくことにした。事務所は会員会社の一角を借りたが、事務を兼務にするとやはり本業優先になり、クラブの事務がおろそかにならないか、やはり旗揚げする以上それだけの費用を分担して、それなりの体制をつくらねばとの意気込みであった。その春上川管内の小学校長を定年退職した海老根一郎氏を事務局長に迎えた。

局長は情報交流プロジェクトのリーダーとして毎月の例会やそのほかの会務に併せて、数種の新聞記事情報を収集し、分類整理して全会員へ毎週送り続けている。最初はスクラップのコピーをとすることで始めたが、量が多くて紙代、コピー代、郵送料がかさむので、スクラップ情報の見出しの一覧に変え、郵送もファックス送信にすることで省力

化、スピード化を図ってきた。この「情報交流プロジェクト便り」は最近号がNo.264を数え、スタートから今日まで毎週途切れることなく会員へ送り続けてきた。そのほか、かわら版、「current」など会員への通信が随時又は月1回届けられている。

### ◎ 初年度の滑り出し

6月設立総会は盛り上がったものの、月々例会は思いのほか集まりがよくない。

10月には旭川で問題となっている廃棄物処理のあり方を研究するため、大西副会長をキャップに一泊2日の研修旅行が企画され、北広島クリーンセンター、厚別コンポスト工場、滝川ごみ処理場、コンポスト工場、富良野山部廃棄物処理場、固型燃料工場を視察した。

また、例会に講師として道立林産試験場の峯村利用部長（現きのこ部長）から講話を伺った。

そんな中で一つの提案を行なったが、それは工業人クラブによる海外視察研修—経済技術交流の訪中団の計画である。

### ◎ 潘陽からの招待

88年の春、私は瀋陽工業大学の招待で北大工学部青木由直教授、小柴正則教授の三人で瀋陽と北京へ旅行した。その折、中国国内は丁度経済の改革開放が深圳や上海の特別区から遼寧省大連などまでに拡大し、大学も卒業生の就職は国が割り当てる方式から自分で自由に選択する方式に変わったという時期だった。“改革開放”これが定着すれば中国は間違いなく変容する。中国側も北海道との経済技術交流の機会を望んでいた。長い目でみると中国10億余の人口、その巨大市場の動向はあらゆる面で日本、アジア、世界に大きな影響を増していくに違いない。中国を知ることは日本を知ることでもある。いろんな意味で中国訪問を実現させたいと思った。

瀋陽工業大学電算機学院長鄭重教授や北大工学部青木教授のおかげで瀋陽市人民政府科学技術委員会から工業人クラブに正式の招待状が届き、12月の末から1月にかけて訪中の準備に忙しくなっ

た。

その最中、昭和天皇が逝去、年号は平成へ改められた。

### ◎ 工業人クラブ第一次訪中団

中国側と打ち合わせた結果、89年2月19日成田をたち、大連へ、大連から瀋陽そして北京へ26日帰国までのスケジュールが決まった。2月22日、瀋陽での中日民間技術交流促進会成立大会に招かれることになった。

一行総勢18名、私が団長をつとめ、大西正剛先生を副団長、伊勢哲郎氏を秘書長にクラブとして初めての海外旅行に旅立つことになる。

厳冬期の瀋陽市のたたずまいは訪中団にとって印象的だった。中国屈指の重化学工業都市、人口360万、2月の瀋陽の空は煤煙に覆われ、太陽は黄色に、人々は分厚い防寒服をまとっていた。

郷鎮企業家協会は私達に講演を依頼してきたり、促進会は経済交流の具体化を希望する郷鎮企業家との商談会を準備したりで、省や市、大学などへの公式訪問以外に様々な対応が求められ、みんな多忙な毎日となって色々な体験をすることができた。

### ◎ 訪中の成果

この訪中は修学旅行のように異国で起居を共にした生活体験がお互いの人間関係、信頼関係を深め、その後のクラブ活動に寄与するところが大きかった。

異業種交流クラブはGive & Takeで、みんながTakeを考えるが、Giveを考えないと長続きしないで3年も経つと衰弱する傾向を持っているが、工業人クラブが5年継続してきた中には訪中時の体験が培った人間関係が働いていると思う。

Give & Takeはメンバーが問題意識を持っており、耳よりの情報やよい刺激を得るだけでなく、他のメンバーにより情報や刺激を提供するということでお互いに魅力あるクラブを創っていくことができるからである。そのためにはクラブ活動を通じてお互いによい人間関係、信頼関係を築く

くことができるかどうかにかかっているといえる。

今では余り珍しくもなくなった中国旅行だが、当時としては初体験で、異国の中にあって非日常的で刺激に富んだ時間を過ごした。ホテルでは二人一組のツインで寝て、お互いを知り、話し合い、協力し合ってそれが行動をしたこと、お互いを年来の知己という間柄に変えてくれた。

また百聞は一見にしかずというが、中国を見聞することで中国への関心は深く、国際的な視野へと広がりを持つことができた。

大陸から日本をみたことで日本をみる目も変わった。国際化時代にあって小なりといえども経営者としてこういう視点や視野は不可欠のこと、その後みんなの話題や関心の置き方が変わっていくことになった。

### ◎ 新製品開発の難しさ

会員企業はそれぞれ固有の技術、サービス、ノウハウを磨いてきたが、社会の変化に対応して新製品の開発となると、ヒト、モノ、カネ、技術、情報などネックが多い。毎日の事業経営に精一杯で、新製品開発の必要性に気づいていても余力がないため手を出しにくい。

副会長でコスマサークルの岩谷公明氏は、電動刈払機の開発に10余年の歳月と開発費を投入したという。大企業でも3~5年でものにならないとやめるというから、10余年も追求するのは並大抵のことではない。これまでの刈払機は長時間使用すると労働者に振動障害が起きることから、無振動の電動刈払機の開発を思い立ち、糸余曲折の末に製品開発に成功し、89年7月NHKテレビで全国に紹介された。92年には湯浅電池と提携して新会社コスマインユアサを設立、社長となり、軌道に乗せることに成功した。例会の「製品開発の苦心談・無振動電動刈払機の誕生まで」という岩谷氏の話は印象深いものがあった。

中小企業における新製品開発の難しさもさることながら、できた新製品をいかにして市場に持ち込み、販路をつくっていくか、この壁をいくつも

めげずに乗り越えねばならない。いかにより新製品ができるても、商品として買ってもらい、先行投資を含めて回収し、利益を生んでいくまでに仕上げなければ企業は維持できない。このところまでに長い時間と苦労と資金を必要とする。

### ◎ 地場の資源をいかす

クラブの研究開発のテーマに「地場の資源をいかす」がある。ノザワ物産の能沢勇氏は研究熱心で、いろいろな事業を手掛けてきたが、その一つに「カラマツ」の有効利用がある。ねじれ、やに、割れをなくすことができればカラマツの利用は大きく拡がる。能沢氏と只石組の只石幸夫氏、(有)ヨシザワの吉澤春峰氏の3社が共同で90年に薬品処理によってカラマツの利用範囲を拡げようとの共同研究に取り組む。幸いこの年から旭川市は「異業種融合化促進事業」を創設してくれた。

工業人クラブは「地場産木材を有効利用するための薬品処理技術の開発」をこの促進事業の対象として申請し、その助成を得て共同研究を進めることになった。91年3月研究成果は報告書としてまとめられ、その成果を実業に活かしつつある。

この間、道立林産試や旭川市工業技術センターに指導・助言を頂いたおかげでもある。

割れない、樹皮のはがれにくい、耐久性のあるカラマツ材が公園や道路などでみかけるようになってきたが、ここでも新製品が利用・普及されるにはまだまだ企業の超えねばならない壁が多い。



木造デッキとパーゴラ（旭川市）

ウッディエイジ 1993年10月号

### ◎ エコロジーの視点

環境問題も工業人クラブの関心を寄せているものの一つで、これから環境問題は重要テーマであり、エコビジネスも盛んになる。環境、農業、健康と一連の視点で発想することを呼びかけてきた。

こうした視点で会員企業が持っている技術、ノウハウ、アイディア、情報を持ち寄って議論していると面白い企画が生まれてくる。

これらのシーズをどんなニーズに対応して製品化するか、社会的ニーズを掘り起こし、使い勝手のよい「すぐれもの」や資源・エネルギーの有効利用を図る。これは前記共同研究テーマの中にもほぼ共通している課題となっており、まさに時代の要請である。

建築廃材急速炭化装置は伊勢工業所の伊勢哲郎氏を中心に研究開発し、「すみ造君」という商品名で発売されている。研究開発には自社の技術力では不十分なので廃棄物工学研究所の三井茂夫所長や道立工試の指導・助言によって陽の目をみた。「すみ造君」は建築廃材、カラマツの間伐材から使用済みの割り箸に至るまで3~4時間で自動的に炭をつくる装置で、木酢液も採れるようになっている。89年NHKテレビで放映され、その珍しさもあって多くの問い合わせがきて有名になった。

### ◎ 全国へ発信を

「すみ造君」を開発した伊勢工業所の技術と、能沢氏の糊殻からくん炭や酢液をつくる経験とアイディアとが結合して、今度は糊殻の有効利用への研究開発に取り組むチームができた。91年道中小企業振興基金協会の研究開発事業で300万円の助成を受け、「糊殻有効利用装置の開発研究」が進められた。

糊殻から炭と酢液を効果的に採りだすことができても、その炭や酢液の成分分析を行い、その有効利用の途も調査研究しなければ成果には結びつかない。

このため工業人クラブは中小企業技術高度化対象事業として上川支庁から助成を受けて「もみ酢液の有効利用」についても調査研究を進め、よい

結果を得ることができ、報告会で発表した。「もみがらの有効利用について」は全国中小企業テクノフェアに出演したことから、東京の〇薬品の注目するところとなり、同社と関係の深いクリーンライフ研究会長大塚勇三郎氏の主催する講演会が東京大手町のJA会館ホールで開催された。かくて「もみがらの有効利用について」と題して伊勢・能澤・山本の三人で講演した。工業人クラブからの発信が道内だけでなく東京でも反応を示すようになってきた。

#### ◎ 晴海・幕張へ出展市場開拓をめざす

成熟社会の日本では商品が溢れている。いいものができてもすぐ売れ、利益が上がるものではない。営業力・販売力が不可欠である。とくに新製品の場合PRが必要だし、販路も地場の市場だけでは小さい。全国の市場さらに世界の市場へ向けて売り込んでいかねばならない。

そこでクラブでは会員へ全道、全国の展示会への積極的参加を呼びかけている。北海道工業展、バイオステージのほか、晴海で開かれる全国中小企業テクノフェアや幕張でのウエスティックなどへも積極的に出ていくようになった。

工業人クラブとして共同出展することで会員単独では尻込みすることでも、互いに協力すればリスクが少なくて済む。それでも東京のフェアに出展すると資金、労力、時間の負荷は大きい。出展してもすぐ売上増加に結びつくわけではない。そうしたネックを開拓するために旭川市はこの種の中

市場開拓の支援に助成措置を予算化してくれるようになった。「研究開発や市場開拓の努力なしに中小企業の活性化はない」の市議会で活躍する大西副会長の提言は市政に反映しやすく、当局もよく耳を傾けて聞くようである。

#### ◎ 産・学・官の拡がりの中で

工業人クラブの趣意書に産学官で・・・とあるが、産だけのクラブでないところも特色である。市に適切な中小企業振興策、工業技術センターの建設などを働きかけ、実現するには政と官は重要である。

また、クラブの研究開発には工業技術センター、林産試、工試、農試などの指導・協力は欠かせない。クラブではこれらの試験研究機関や大学の先生、そのOBの方々を特別会員にお願いしている。

それは研究開発上必要だということもあるが、それ以上に特別会員は様々な知的刺激や人的広がりをつくりだしてくれている。

異業種交流をやっている人は人一倍好奇心が旺盛で研究熱心で、人づきあいが良くて楽しい人が多い。始めからそうでなくとも、やっているうちに変わってくる。おもしろい情報を仕入れてくる。情報感度がよく、話題が豊富で、行動的になる。そして「類は友を呼ぶ」。その中で情報集積やヒューマンネットワークが形成されていく。新製品のアイディアや販路の開拓には不可欠の条件である。

#### ◎ 中国そしてカナダへ—国際化への挑戦

クラブ発足後半年から始まった国際交流—第一次訪中はその年の暮れ瀋陽から鄭重教授、劉鉄生副主任（瀋陽市科学技術委員会）を迎える。翌90年3月第2次訪中団は大連、瀋陽、長春、北京と行動範囲を広げた。天安門事件のあおりで延期になった遼寧中日民間技術交流促進会の訪日団招待も90年6月に実現し、鄭団長ほか郷鎮企業家の方々は初めての日本・北海道・旭川をじっくりと見聞し、交流することができた。もちろん、経済的な成果らしいものは今だ生まれるまでにはならない



中小企業テクノフェア（晴海）



遼寧中日民間技術交流促進会発会式（瀋陽市）



カナダ視察団員と堂垣内前知事（エドモントン）

が、長い目でみるとこうした交流なしに中国との合弁合作は成功しないであろう。これから21世紀へ中国のポテンシャルはますます大きくなる。そうした先見性、関心が経営者に求められる時代なのである。国際化への挑戦は91年6月カナダのエドモントンで開催されたISCORD'91へのエンタリーである。只石組の只石幸夫氏、日興金属の平岡義啓氏、アサヒ動熱の佐藤次郎氏、伊勢工業所の伊勢哲郎氏はそれぞれこの国際シンポジウムで発表する論文の審査にパスしたので、そのほかにこの国際的な寒地技術開発研究のシンポジウムに関心をもっている会員、阿部衡一氏、臼杵真治氏の母堂、吉澤春峰氏、小石川勝氏に北大大学院生のピーター氏（米山教授の教え子でトロント大学出身）をガイド兼通訳として参加してもらった。世界各国の大学・研究機関からのメンバーに伍して各自持ち時間一杯、自分の研究についての報告をして帰ることができた。これは参加者にとってよい経験となった。次のISCORDは94年にフィンランドのヘルシンキで開催される。

### 異業種交流組織に期待されるもの

92年に異業種融合化促進事業の助成を受けたのは、クラブ副会長でホッカイの木村晃久氏をリーダーとする「きのこ生産施設としてのハウスにおける冷暖房簡易施設についての研究」である。雪の冷熱を利用し、きのこの周年栽培を可能にするシステムの開発で、この開発が成功すれば農家の副業（本業でもよいが）として福音をもたらすものと期待されている。

異業種交流、融合化はこうした社会的ニーズに対応し、先見的な取り組み、技術開発、システム開発が必要となる。そのアイディア、ノウハウを含めて自社内だけでは限界があるから、課題を共有できる仲間が協力し、ほかの経営資源も活用して問題解決への挑戦を続けることになる。この過程で自社内部の経営革新、人材養成をどこまで進められるか、そこが会員企業自身に問われているようだ。ヒト、モノ、カネ、技術、情報というが、結局はヒトの問題に帰着する。経営者の仕事は企業経営を通じて、従業員に給与を支払うだけでなく、仕事を通じて、希望や生きがいを共有し、やればやっただけのことが正当に評価されるシステムを自社内に構築することではなかろうか。

そのためには経営者自身が経営理念を明確にし、経営目標や経営計画—夢や希望とその実現へ向けてのプログラムを持ち、従業員と一緒にその実現を図ることだと思う。

そのためには経営者自身が経営理念を明確にし、経営目標や経営計画—夢や希望とその実現へ向けてのプログラムを持ち、従業員と一緒にその実現を図ることだと思う。

異業種交流活動は今後一層活発に進められることだろう。

社団法人 北海道林産技術普及協会では機関誌ウッディエイジ  
(B5版)の特集号を頒布していますのでご利用下さい。

価格はいずれも実費 ( ) 内は送料

・特 集 号

カラマツを使ってみませんか※	(昭和56年)	25頁	400円	(175円)
Theおがこ	(昭和58年)	26頁	400円	(175円)
窓(木製サッシの実用例集つき)※	(昭和59年1月号)	35頁	700円	(250円)
木材工業とマイコン※	(昭和59年11月号)	17頁	340円	(175円)
木製軽量トラス※	(昭和59年12月号)	16頁	320円	(175円)
木の良さ再発見	(昭和60年1月号)	22頁	300円	(46円)
今なぜ広葉樹か※	(昭和60年3月号)	22頁	440円	(175円)
カラマツ・セメントボード※	(昭和60年10月号)	43頁	860円	(250円)
単板積層材※	(昭和60年11月号)	30頁	600円	(250円)
キノコ(その1)※	(昭和61年3月号)	29頁	500円	(46円)
木材の農畜産業への利用※	(昭和61年5月号)	27頁	540円	(250円)
「木の家」百年持たせます※	(昭和61年9月号)	23頁	460円	(175円)
キノコ(その2)※	(昭和61年11月号)	23頁	600円	(46円)
林産試験場の成果※	(昭和62年1月号)	43頁	860円	(250円)
林産試験場移転整備※	(昭和62年5月号)	25頁	500円	(175円)
日曜大工のすすめ※	(昭和62年6月号)	24頁	480円	(175円)
木造住宅の保守管理※	(昭和62年12月号)	23頁	460円	(175円)
木の良さ・木の香りを教室へ※	(昭和63年7月号)	33頁	660円	(250円)
木質飼料※	(昭和63年10月号)	17頁	340円	(175円)
第38回木材学会大会の概要※	(昭和63年11月号)	33頁	660円	(250円)
最近の木工機械と刃物	(昭和63年)	47頁	500円	(51円)
わかりやすい木材乾燥	(平成元年)	38頁	1,500円	(51円)
木造住宅の良さ	(平成元年2月号)	26頁	800円	(46円)
道立林業試験場・道立林産試験場 試験研究のあらまし	(平成元年11月)	35頁	600円	(46円)

註：品切れの場合はコピーになります。※印はコピー。